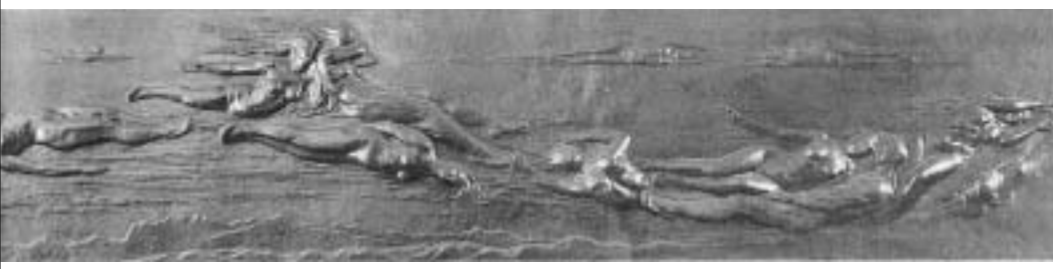
ISSN　0582−4478

京都大学図書館機構報



静脩

2006年８月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 43.　No. 1

共に育てよう、京都大学学術情報リポジトリ

国際交流･情報基盤担当理事兼副学長　**西村　周三**

すでにご存じの方もおられると思いますが、去る6月8日（木）に、京都大学学術情報リポジトリおよび準備サイトを試験公開しました。「（機関）リポジトリ」という言葉にはあまり馴染みがないかもしれませんが、大学等の教育研究機関で生産されたさまざまな知的生産物を電子的に収集、蓄積、保存し、学内外へ公開するためのインターネット上の電子書庫であり、発信拠点でもあります。近年、海外の大学図書館を中心に設置が相次いでいます。日本ではごく少数の大学が先駆的に取りかかっていたに過ぎませんでしたが、平成17年度から国立情報学研究所（NII）の最先端学術情報基盤（Cyber Science Infrastructure=CSI）の構築推進委託事業（以下、CSI事業という。）により、19大学がリポジトリの構築に着手しました。本学もこのCSI事業に採択され、昨年度から構築を開始し、このたびようやく試験公開の運びとなりました。

CSI事業を開始するにあたっては、総長はじめ、役員会、部局長会議のご承認をいただき、全学的な事業として全学のご理解とご協力を得ながら進めています。検討・構築体制としては、私が主査を務めます「学術情報リポジトリ検討委員会」を設置し、各学部、研究所、センター、事務部等から15名の委員に出ていただき、方針や方向性を検討しています。また、個別具体的な課題についてはさらに多くの委員に加わっていただき、システム構築、制度整備、コンテンツ形成という3つの作業部会を設けて検討を行っています。

上述しましたように、リポジトリは海外で盛んになりつつあります。リポジトリの設置状況がわかるRegistry of Open Access Repositories（ROAR）[1] を参照すると728のリポジトリが立ち上がっています。国別に見ると、米国196、英国74、ドイツ65、ブラジル45、カナダ32などとなっています。日本は現在のところ16しか登録されていませんが、平成18年度には、17年度採択大学を含めた57大学が新たにCSI事業によりリポジトリ構築を行うことになります。順調にいけば、数ではドイツに次いで4番目になりそうです。

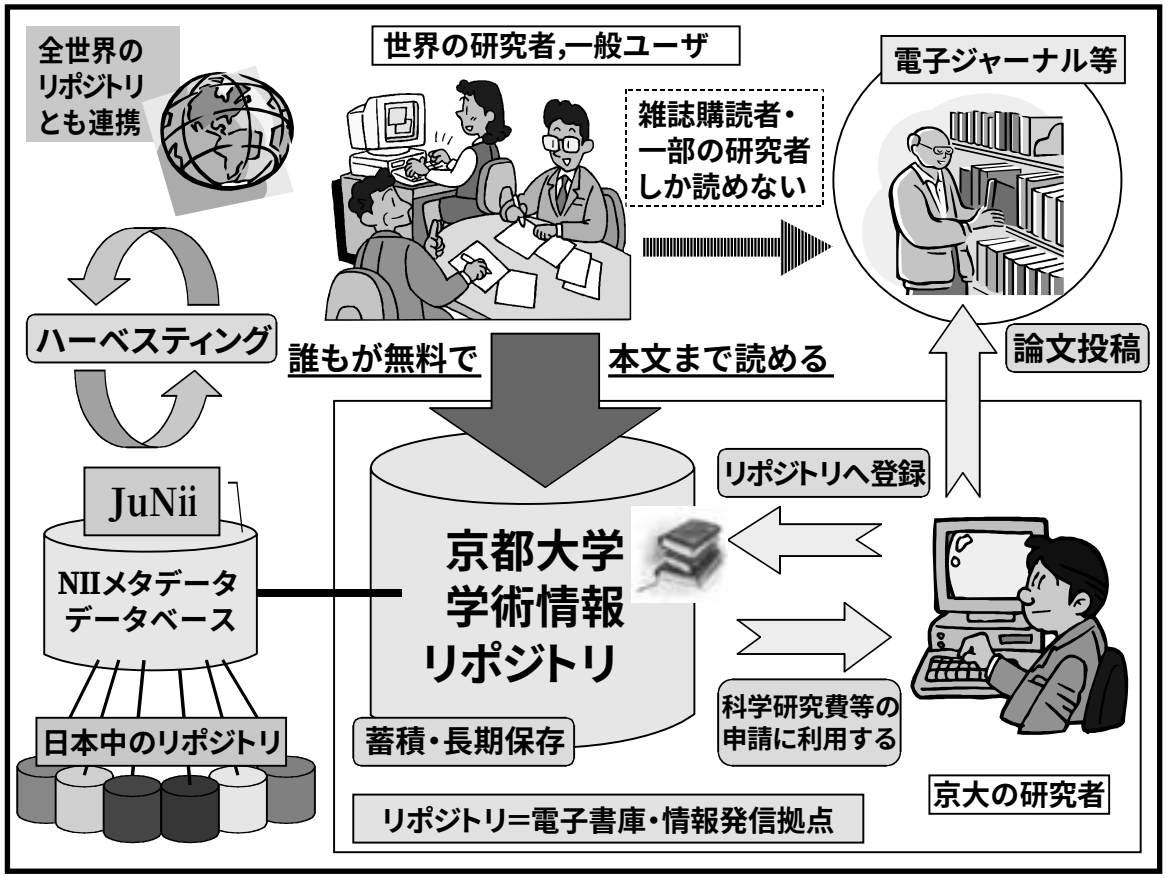
また、国内の情勢に目を向けると、各種の答申においてもリポジトリの役割が強調されており、例えば、『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』（平成18年3月23日、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会）[2] の中では、「『機関リポジトリ』への取組みが、教育研究活動を一層推進し、大学からの情報発信を強化するための方法として、世界的規模で進みつつある」、「大学からの情報発信力の強化や、大学の社会に対する説明責任の履行の観点から、またオープンアクセスへの対応という観点からも、有用な手法であると考えられる」と記述されています。日本においても、リポジトリの構築、整備が今後ますます盛んになる兆しが感じられます。

本学におけるリポジトリ構築はまだ緒に就いたばかりで、一朝一夕には解決の難しい課題もたくさんあります。しかし何よりも、コンテンツが入っていなければ、リポジトリはただの空っぽの箱にしか過ぎません。学内の研究者の方々にはぜひ、多くの教育研究成果を登録していただき、京都大学学術情報リポジトリを共に育てていってくださるようお願いいたします。

＜注＞

1）<http://archives.eprints.org/>
　数字は8月7日現在

2）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015/020.pdf>

（にしむら　しゅうぞう）

京都大学学術情報リポジトリ（http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/）